

5) 進行尿路上皮癌に対する MTX, 5-FU 時間差投与, CDDP, Epi-ADM 多剤併用療法の効果

西山 勉・照沼 正博 (厚生連長岡中央
総合病院泌尿器科)
谷川 俊貴・佐藤昭太郎 (新潟大学泌尿器科)

【目的】進行尿路上皮癌患者に対する MTX, 5-FU 時間差投与, CDDP, Epi-ADM 多剤併用療法 (MFAP 療法) の術前化学療法の効果について検討した。【対象と方法】対象は 1991 年 9 月から現在まで新潟大学泌尿器科ならびに厚生連長岡中央総合病院泌尿器科で治療された尿路上皮癌患者 18 例 (男 17 例, 女 1 例) で, 年齢は 41 才~71 才, 平均 58.7 才であった。方法は第 1, 8 日目に MTX 100 mg/m², 5-FU 600 mg/m² を 3 時間の間隔をあけて投与する時間差投与を行い, 第 2 日目に CDDP 100 mg/m², Epi-ADM 40 mg/m² の投与を行った。全て術前化学療法を目的として行った。【結果】施行回数は 1 回から 4 回で, 平均 2.7 回であった。治療効果は CR 6 例, PR 8 例, NC 3 例, PD 1 例で, PR 以上の奏効率率は 77.8% であった。副作用は骨髄抑制, 消化器症状, 脱毛を高頻度に認めた。【結論】進行尿路上皮癌患者に対する MFAP 療法は非常に有用であった。本療法を施行することにより, 症例によっては臓器温存が可能となるものと思われた。

6) 性腺外 (縦隔および後腹膜) 胚細胞腫瘍の治療成績

小松原秀一・渡辺 学 (県立がんセンター)
北村 康男・坂田安之輔 (新潟病院泌尿器科)
寺島 雅範 (同 胸部外科)
栗田 雄三 (同 内科)

1982 年以来, 性腺外胚細胞腫瘍 9 例 (後腹膜腫瘍 4 例, 縦隔腫瘍 5 例) を経験した。患者は 18~38 歳 (平均 26.7 歳) の男性で, 頸部腫瘍, 咳, 胸痛, 呼吸困難, 腹痛, 腹部腫瘤, 女性化乳房などの症状で受診した。精巣には触診, 超音波検査で腫瘍を認めなかった。組織診断は頸部腫瘍, 腹部腫瘍の生検, 縦隔の吸引細胞診によりなされ, 一部は HCG ないし AFP の高値により胚細胞腫瘍と推測された。精巣腫瘍と同じ化学療法を施行, PVcBA 療法の 2 例は癌死, PVB 療法の 1 例, VAB-6 療法の 2 例が NED となった。現在は, BEP 療法 (bleomycin, etoposide, cisplatin) を用い, 難治が予想される場合には cisplatin 投与量が 2 倍の高用量にて治療し, 4 例いずれも NED となった。副作用は消化

器症状, 造血器障害, 脱毛が主なものであるが, 総投与量が多い患者に末梢神経障害がみられた。精巣腫瘍に比して予後不良とされてきたが, 適切な化学療法と残存腫瘍の摘除により治癒し得ると思われた。

7) 当科における婦人科腫瘍の MRI 診断の有用性について

本間 滋・常木郁之輔
藤森 克彦・丸橋 敏宏 (県立がんセンター)
高橋 威 (新潟病院産婦人科)

MRI が日常診療に登場し, 婦人科腫瘍の画像診断において画期的な進歩がみられるようになった。そこで, 当科における婦人科腫瘍, 特に子宮腫瘍についての MRI 診断の有用性を検討した。

症例は子宮頸癌 6 例, 子宮体癌 10 例, 陰癌 1 例及び子宮筋腫 6 例であり, 子宮筋腫 4 例を除き術前 MRI 像と摘出標本との比較検討をおこなった。また, 最近経験された陰癌症例についても検討した。

成績: 子宮頸癌 6 例中 5 例は頸部浸潤の深さの診断が一致し術式決定の参考になった。

子宮体癌症例はいずれも筋層浸潤の深さの診断が一致した。

子宮頸癌・体癌ともに MRI によるリンパ節腫大の判定は困難であった。

陰癌症例では, 癌の存在部位, 大きさの診断に有用であった。

子宮筋腫では, 筋腫結節の個数, 存在部位が明確に描出され, 特に内診で明らかでない粘膜炎筋腫の診断と, 核出術の術前検査に有用であった。

8) 当科における CDDP dose up 化学療法の臨床的検討

柳瀬 徹・本多 啓輔
荒川 正人・花岡 仁一 (新潟市民病院)
竹内 裕・徳永 昭輝 (産婦人科)

補助療法の進歩により CDDP の dose up が可能となり癌化学療法の奏効率改善が期待されている。当科でも最近 CDDP dose up (60~70 mg/m²) による化学療法を施行しているため, その効果・副作用につき報告する。

対象は, dose up 群 (D 群) 12 例 (卵巣癌 5 例, 子宮頸癌 4 例, 子宮体癌 3 例, のべ 27 コース), 対照群 (C 群) は従来の dose (50 mg/m²) で治療した 10 例 (卵巣癌 6 例, 子宮体癌 2 例, その他 2 例, のべ 28 コース) で

ある。D群の奏効率及び腫瘍マーカーの改善率は、それぞれ9/10例(90%)、11/11例(100%)であり、C群(3/5例(60%)、7/9例(77.8%)より良好の傾向にあった。GCSFの投与にて白血球数には有意差を認めなかったが、血小板数はD群で低値(grade 2, 3)を示した。消化器症状はD群で重篤な症例が多かった。また腎機能には両群間で差はみられなかった。

CDDP dose up 療法は、副作用対策は課題となるが、奏効率に改善傾向をみた。今後は長期予後についても検討を進める予定である。

9) 子宮体癌におけるリンパ節郭清の意義について

齋藤 麻里・安田 雅弘
五十嵐裕一・倉林 工
金子 享・中村 稔
吉谷 徳夫・児玉 省二 (新潟大学)
田中 憲一 (産科婦人科)

1971年から1993年4月までに当科で治療を行った子宮体癌症例は148例で、術前診断1・2期の143例について術式、リンパ節転移の有無と予後からリンパ節郭清の意義について検討した。子宮体部浸潤度とリンパ節転移率は、 α では0%、 β 6.9%、 γ 25.7%であった。頸部浸潤の有無とリンパ節転移率は、非浸潤6.5%、浸潤15.6%であった。頸部浸潤例は、体部浸潤度が深くなり、リンパ節転移が多い傾向にあった。転移部位は、骨盤内リンパ節のみが7例、傍大動脈節の4例は全例骨盤内節に転移がみられた。術式別生存率では、リンパ節転移陰性で体部浸潤度 γ 以上において広汎子宮全摘群は単純全摘群と比較し予後は良好であった。リンパ節転移例は、予後不良で術式による生存率の差を認めなかった。再発部位は骨盤外が多く、リンパ節転移の徹底と郭清範囲の適応が今後の課題である。

10) 甲状腺未分化癌19例に対する CDDP を中心とした多剤併用療法の臨床効果

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
新潟病院内科
佐野 宗明 (同 外科)
長谷川 聡 (同 耳鼻科)

甲状腺未分化癌の化学療法は注目を浴びつつあるが、報告の多くは ADM を中心とした多剤併用である。我々は甲状腺未分化癌19例に対し CDDP を中心とした多剤

併用を行い、良好な結果を得、5年生存が2例でたので報告する。

【対象および方法】1983~1992年まで当院で加療した甲状腺未分化癌19例全例に対し、EAP (CDDP 80 mg/m², ADM 30 mg/m², ETP 60 mg/m²×5) 40クール、EP 8クール、Hi-Dose Cis+VDS 3クールを施行した。

【結果】腫瘍縮小効果は、CR 4, PR 4, NC 4, PD 1で、奏効率は13/19 68.4%であった。1982年以前の CDDP 非投与群15例の MST 78日、6ヶ月生存率13.3%、1年生存率0%に比し、CDDP 投与群19例の MST 175日、6ヶ月生存率44.7%、1年生存率25.6%、5年生存率19.2%と有意に延命効果があった。血行性転移の有無別、主病巣切除の有無別に効果や生存率に差がなく、PS2 以下の全身状態のよい、比較的若い、多剤を3クール以上投与できた例に有意の抗腫瘍効果、延命効果がみられた。

11) 食道表在癌の治療

片柳 憲雄・丸田 有吉
藍沢 修・桑山 哲治
齋藤 英樹・山本 睦生 (新潟市民病院)
大森 克利 (第一外科)

食道表在癌27例(31病変)を対象に壁深達度、脈管侵襲、リンパ節転移、予後を検討し、表在癌の外科的治療について考察した。

ep (2例)、mm (3例)では脈管侵襲、リンパ節転移を認めなかった。sm (22例)ではly 陽性を11例(50%)、リンパ節転移陽性を9例に認め、n2: 3例、n3: 3例、n4: 3例であり、このうち3例は頸部リンパ節転移陽性であった。術式は食道抜去術6例(喉頭全摘1例)、右開胸による食道切除術21例であった。術死3例、合併症による在院死3例、他病死2例があった。再発死亡はsm、n3の1例であり、c0、術死、他病死を含めた5年生存率は60.2%であった。

以上より、sm 症例では進行癌と同様の十分なリンパ節郭清を含む根治性の高い手術と術後の合併療法が必要であると考えられた。